渡島筆記

下

別記

内閣文庫
和書 類
三五一一七 號
二 冊
一〇 架
(二冊)

内閣文庫
番號 和 35117
冊數 2 (2)
函號 178 222

陸奥

国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

同女の支度とゝのへ右御ハ歸し申ける
以へ辛労してかへりしと申ても尤
有へきうちわれたれと開き結戦闘有
此そ千余の陣を其手の其千余年とて以て一万
此長くとりて其毛宝とも多くわたる
つ死して女子一人男子二人ありイミカリル
長醴城設て三人を据く初ハ疑懼けれ
據つきましつ再三に使を度にて八萬五

雛し給ひても嬉顔に懐しみける二人ともに
かくて慮浅かりし二人にゆく一つし末
乃弟ハ留りて家を守れとて出行けり
いれと歸らん程を待わひて留めてかへり
来りても何家親をもて返らぬまゝ何事
なりてゆくまても絶てなしいかに
此親もやいひかしも姉見れ我うしや
そかりて家をなれしとえあらん人は

なくの侍て見れに思ひあまかりしまゝ
かりの遅きハ疑もなく名部の中に於て
いましこん神か我夢にい見え告ちう
我か親明ちうるいまやとも親か世るも
其前に代しまて秘蔵せし太刀鎧弓矢
爰に見ひ太ら代々伝て我乃身の護と
成つきいシャモの国より渡りし神にまて
させ給ひてより宝物の数と言しく

佩せるまゝに出立ぬ様くしけるもかひ〳〵しく
ともに詞を交して厩を出てイシカリ
の方へ向ひイナオを取て神を祭り鳥
も果と痩て飛ぶも猶く翔り去るまで
見せしは二人の馬して衆中に抜出たる難
義に及ひ横して向ひたるに紛ひ行きまし
擲ちあつとて見たれは既に岸に来たる
しかハ佩せる刀を抜き多勢を伐なりし

追拂ひ二人を救ひ出しければイシカリ人これそ
第一の大邑なれとまつりて蜂起し来れ
人数雲霞のことく第一人を圍ふる才
勇を振戦へハ追つくものとなく敵の
中にも青年のことく出立しまゝ打て撃て
かゝるに此等の所勇壮の様并に前に見え
しれ信の如き本に逢て雖とのまゝして不思
喜の情態なや何れの文も筆に紙得る

ためよし弟の勇かれなる者にありけれハ得て
數刻戰疲れたる故にや心よわりて顛ぬ
倒るゝ所を撃留らんとし時既に危うし
し我弟是よりの孫者しれ若者をれきてやうやう
身を避るく打拂ひてもや戰ともの
まれ敵よりの徒て三人ともにとりこに
此上ハ同鄕の人我討てひし勢来る由傳
達させ名をも争ひイミカリ大軍来る由聞えけれは

戰ふ事かハ右を勝てハ其ひとかうして
先つけしてみを喪せよと父の時頭を
振りていやしくイミカリと耳もて大小懸陽
さるまじく以子の歴つられハ初よりつ紙を
得ら其我知つゝ私更に死地に臨みて
謀略をめくらしハ男子るが所なき様と
あかけるに不を許すまゝ軍して兄弟共に
命を捨し親の詞を入て此しるべし

其時それ家の寶と歎の心若くはなりに取出る
何し一旦此怨我をのひよ為年まれ前にし
寶を抱き山中に隠しとして當事をい守
護とします、さてやや年来せ申しハの御
何なりけれ共先人此名をとどめある生も
しかとつひのりしれ爰にいへりる嘔りしや
我に向ひ老女ありて初めて字側に来聞て
居るりしに清しよりてかへる時のちにる事

こそ聞伝りさ候ハさぬれ此事ハなくハわり
住を違へりし御人々を憤りさ宝も今に
ひきさて求めらるも身命今なお謀れり三人
のへて相て暫時山まかされ従人なりけ
我一人なりしかり為行りけり夜きつら上下
そしまりて山へ逃つりせ右方イシカリにハ文
ナ事に許議をなし彼等三人とも比
衆して居りし今は人ヨロチクの一時に集りて

貴寺ハ必定なるところの備もやありし先へ
まちてこなたよりや押もどしと逼なる兵
中に一人肩さしいりせ進出て彼小御
堂に隠れしとも素より恐るゝなき次
第ありしと歎の情を察してこゝ待に庭
を隔れ備へ諸人を継て命しまり二三
人をかの地に至りかうしつ路て後へ也
高議すへしと日来定り二人連て様き

与一（ヨイチ）近臣立入ても甚遑あり無酒戒
厳乃容ゑなりしそれの宅の側にいりて祭、
見るは寂しうる人の集る見海尭
みされとも行て又山一や道入たるも宿りて
思えは屋上より煙と立のぼれるなし
しもしてそいつまやと寛ゆるとさし給
そきたまひて見弟は更に見えてはやしま、
老嫗一人斗そ爐邊に踞る其の體

ゑかりけるとく見れハ眼の光ハ星のよ
うに白髪ハ秋乃山の枯葉の上に
雪なと降積たることく面の皺ハ冬の
海のあら浪の幾重とも立重りたるに口の
かたち鯰なとのことくなるハ岸の波乃上に
浮ひ霞たる出岬に蔓の草木なとの
繁りたるよりも鼻の穴乃あたりハ猶
また石山の洞に鹿の角振立ておそろしけなる

風情なりけるにおそろしく息なと火焔をも吐
焼山の石を飛しつゝ訪ふかとおそろしける
形は人かましく見しハなかりしかとかく
あくまて常人にハ違ひたる様に見ゆれ
身にしみて悍しく一目見しよりも後
目をも見あかされす見る先に更に思ひ
毛立たゝ菩提を念しけるにさす
みなり扨日も暮ハうちかさなる人々て

あるは我しつ来りて動静を窺ひてハ心を
知らし容氏をやそて終日わりしたれ
嫗をも疾く彼等の遊偵なることハ知らすして
されハ終にそらくわらひきて二人の家
父母家のこハかゝる事を密かに家主ハ何にも
らし實氏めて詰りを催すつ事あれと又
く殊なる美人なりけれとも未定る婿なし
以ハまた世の中にも紀男ばりハ婿とたすされ

こそあてさかりしハ如何なるわか力そかなるもの誰
つらぬ拵て清る人おうしんやむしろハ家の寶
盡く譲與子爲りけ家主寶とらし子たア
井ノ九國より来りわすものとも珍重の物
多くそれハ他乃大御の何よりも取長
違ふへ事を構へ謀慮を費し一葉の人と
たくむそれと細しとかゝるつ者等なるなのと
しらぬ人へとも見ちり二人のようち一人へ幸不

婿と成給へしとて其まゝ媼かく弁解て
抱付けれハいふなともふけれは見苦しく又
此子といへとも只人ならぬ形相なれハ是や是
嗚呼やせむと懐しけに傍希世の美人を妻
として希世の寶を得る心なれハおもひそめける
而し鮮なりける夫婦ハ只一人の者なるこそ
婿なれともむしをハいひなからそれよりも両卿の
謦を解すると云事也此等寄語往

攻カムサツカ

論するに及ハすしてもとより紀事紀作
らす今此事を作らハ彼の性質意氣任
使然好寶を貴ことかくの如くその國
情を察るにつきて是り亦文章事物然
形容することそ頗巧なる事にて一奇なるへし
故に驚歎の限りなきなる又カムサツ
カを攻むる事を作なる段もなきにこれ
とかくその必偃臥し手をて心を撃て

吮ゐて呻吟するごとく嘔噦するがごとき
是れ聲また僧の經文を誦するより其
後にして猿樂の謡ごとき上手の字ハ急なる
聽者おもしろく声を發し吐するごとく嗟嘆
おもしろきを助く又イクハシなるを執て席
を撃柏子をなす其感激の余りにいたりてハ
同音に吐し叫て誉比ユウカリといふ字の
つ綴ふかきてたてるの外に面白さのなるは

よしユウカリと善かるものゝ名なりといふ酒癖
の逞けるほどくれいみ指あそ暇日あきたる
なりとぞ其勇氣憤發の所を聞てハ覺
えず聲を發し直ましきほしく戦へよ
既に彌の判斷を報るにいたりてハ亡身より
只合書所ゆかりて法し以何きいふ家といひ
望み又離れ作身を爲し先ぞ然らし祝
を生したりしおひてハ女子草嘈嘈流涕悲

シャツコロベ

義經事

哀慕をなし侍りして國にたへなくはなし亦
シャツコロベといふものあり是ユウカリとて變風
ありてユウカリに等しきものにて至て長き物語也
唯男女好色戀慕の情はなくてはなしまたなく
またなき戰鬪義勇等の事をかいて一度
跡しるしかたるをユウカリ源義經の事をいへる
ても其昔古調也されど人甚聞得るに紀
所多く聞得たる事跡連續せる所を始

終に全く覺へさるものは既に稀也去るに終
ともに大凡おきてはなくみて取るハホウガンニと稱
し又ホウガンドノと稱して家難を避けるに
國より來りて此地に來り人の家に婿と
なりてありしか後の方よりまとひ
寶物をぬすみ舟に乘りて海に入りし後歸て
婿の見へたる所に悔しく返てホロベツにて
いとわりしか御子風波の難にあわれし事

迯れしやと云但女子を取返さんとて追しとなる
様に茂き山中にやて云し九をしれどもかくも
難し義經卻附とて上說あれどもユウカリ
乃文句を作りし事共の本なる段戦闘に及べる
且己れりホウカンやし梅は是却て卻附にはる
其れ證とするも爲し津輕ぬりをまて追
きたりしと云やて 以上二事出海隨筆之說 津輕にホロヘツあり
ホロツキあるし 此と蝦夷地の國乃名あり一致

しかしてホロツキホロベツ我混しなる様ぞ出る
ホロヘツ此小大川と譯をホロヘツと以上一致する
既に多しさられどもイツールケク說北の附る
海より深みしを云るれはフウヤのホロベツ
我近しみしも遁義經乃事ユウカリ其文
髣髴としてわずかの事ばかりに取るべき
ものなるゝ様と更にも疑ぬ一致比なる
されより似るも極に無くて附會の說成

作者信之へかしこて但東濱にてはイウブツれ
遏かして ホウカンの事ゆ傳へられしより以て
今は知らず西遏にては イヒカリと云ふ奥にも
専らホウカンと称し其前にてはなしと云
ともうるはしきもてはやすの様歴の
祖者なし上原熊次郎の妻へに書を
聞て的携かたまきしにて冊字をのぞく書と
志しぬこそ歓ばしとて之はされて説とも先

兒戯

祖をうみかきするのをもて絵かへと称せ
ホウガンとのみ其巻物をとられたより初め
宝巻化を出て書あきかりのに成らうと言
ものとるの棒腰を扱へさうて読まれたる併ユ
ウカリかん意を発をユウカリみるるもて思ふ
思ひてユウカリまて寶といひて巻軸といはせ
児童の游戯細條蔓草或は小竹を捲て
輪となししもの力を用ゐる櫛まはるもしらず

所以棹以執て手ひ捨く捨あつると縮て
是又これを砂中に埋こてつくえれアサラミ
トいふもの捕學記みて砂中なるハ波底ゟ
潜りの小にえ球を輪以空ゟ飛り左右
小立ちら待これと貫くみて得るる方勝てかるゑ
まる方の人と一人これるて已の方に加へ增り
隨ていまる方の人多くなるを戯とし稚童丁
壮並白丈爲と之雜里携ひ戯るい齢と足

あられまた風俗にハ知る人絶てなしその
中むかしなるものハ二人丈餘の陽て立並を
繋て綱の兩はしをゆるやかにむすびて旋
轉ハ上ゟ足をけ人立て頭を持ハらまてハ地を
囘らしめて撲ちをさむ一人あつてその中ゟ
躍入綱の来て地の掛けさしに踊り戯
幾度ともなくあり 後にハ一度地に據り
高星たて三たびきりみて飛揚りて綱を続く

あるハ避損されて忽脚を掃はれ倒るこれ
よりて優劣ある事を分つ其くさわ
その躍越すると見るに軽捷甚妙なるもの
戯はトンボノツシユエトツシカウシと以てトンボノツて
繩をするシユエは廻ありトツシカウシを踊躍也
輪は櫛て捻をウゴカリプチヤシと以て高て
飛つて貫はカレプチウと以ての獨あ子志
戯とするものなし變有りムツクルあるも至て

微小乃物なりとも楽とする事ならざるハ遠
魚を捕りて綱を用海獣をヤスと以て地
及て刺前の獣のごとし鳥獣は弓矢を
用弓を丸木にしてオニコと以て本を用
オニコとあくぎい也弦ハ鯨魚の筋を用ひ
ときハ東れて木皮又麻をよきあつきもあり
作る矢ハシヰキと羽シヰキともいふつやと以て
ものなり鏃は二段まづからし若ぬ事易ぎ

様にして熊を射る事ハ熊がおのれを箭
の集る所を歯にて抜去る時鏃常に熊の
肉に留まれるあれハ用ひたる鏃にハ毒を
ぬる事毒一法ありて其郷土によりて小異
あり烏頭を以て主とし是の長む蛇に
蕃椒および水虫一種にて其他に地蜘蛛
もありて魚を射るにも是を用ゆる
加ふるもありこれ烏頭を製法ハ左の如し

巧拙ありて和俗の茶を好むかことくまたこれにまして
氣味を増して其の類にて巧拙の別へく
まさして異しなる毒の効劑なることを主とし
ち夜ましても取用深中に入て其の製毒より
中なるものしめて用ゐてなるとき熊を
射て一箭にしてハ二匹なりしくハ五六歩
外去る間忽ち斃れ又一足も蹲りて死する
ものまたまて射殺とともにするものなし人

鮮からとて東濱トカチ川の上オトブケといふ
ホれトレンニキシテといふ山の善き鹿を追て拾町
ばかりにて見つけ今猶其所シアリベツの
ニウケワクノ鹿を射つゝ綱得きて十八九年前
山に入て若二十ばかりとなる迄て十三頭を
斃して其他の獣を射る事皆此類なりて
名人と称須た人なるよし今は老いたれど
伊かし関東シャウナ井のシッコトリしても熊を射る

時節

年に四五頭獲ることありしよし其のひと
つもして熊の毛皮を欄木ウスするに用ゆなり
乳シモ子といふもの是を以て病をなほすとぞ
よりて海物の羨ある事も妙なる事今は所
其月四時十二月等の名あるといふ新歳
のみの佳節なるといふ事なく無也あれども
なし会計の年なき月給暮年をとも定る
ことに又以て須己の齢をしるも日々の暑もあらず

爾ありされは志ゆ事まされて精好つくれハ其と
と学ぶれて其用との事物く酒ほとハ不及り
飲みて富めくなすとなく身労を免れぬを
以ことんと貴そてとらぬかし　すゑて是ら
に風俗悦寒かりし語言すゝるにて我か神
代乃昔儀となのまゝに傳へらるゝなとなるは
あるまゝにして見るものゝかなゝるとを
思ふ者ハ情を勤んぬといふこそかきなれし

唯一年に一まひオムシャと云事ありき是佳
節のとき終年諸用の會稽をとしあるもの
其州の松前より貴人と所々へ一同にして
産物の交易するにつきてハ小吏をして重き
法度とおほせしなかりき國の遺也とオムシャと
云ふものなりとなん名を何ゆへて
上とらかて何かいさゝしか事をつけにけるとに
名也甚始て和船来り立りし事をいふ意

なれハと喜ひ一禮を述へ畢て扨今ハ漁
猟の時節にまかり居て懈る事なれとも近邑
とも睦ひ争論なとハなく候魚かくまてハ川
かみ迄も雑船にてハ出來る故ひ助多く
幸なる事として賦を納まてもなかれなと
いふ事にて念頃に喩し扨酒二椀つゝとのまし
又烟草煙管等それくにあたへ是也秋
にいたりし海河山澤の産畢竟貫人等辞し

ウヱトッヽコバク

かくありしこて又條令を示し且先のおいて
網や船をも追ひ々ひ春まて來るを待ゐ
物を貯へ助なかくて善へ此船は大に酒の酒
しめ女子小児まても濁酒にて皆酔ひて
歌舞轉臥ものさえて亂ひたる様をウヱトッ、コバ
クいふ今をシャーランバといふ是則謝恩とし
いふものにてシャーランバは則さらば也來去
なとに用ゆる也一人ことに是を言ふて六人ありせし

品の肴餘れるをはかりそへ後日の調菓なとに使
ふへし此日遠方より三日四日とかゝる道を
来りしもの日数をまたて歸るか酔て前後も
倍華にして我知らすれ常なき日付を
費しぬれは念なき事也一日飲み二日三日も臥
りの時ハ壽十餘日我空しくするといふ
猶も萬のことに不便なることそのうへにや
年々の憾みし條喩をもて酒をやめるか

禮の事もなく終りぬれハ世間と祝ひて帰りし時
れオムシヤとハ畢りし歸らせまうする時なれハ
ウエトツヽコバクにて時ハりの大に燕飯を出して
とらせ終りてオムシヤにて清禮をまうけし出エ
トツヽコバクして歡樂を專らする類にて貢人
等のたてをとを取あつめて止まれ事なれは筆
いはまとてもとえもなる事あるまして尽くして保
オムシヤは重くウエトツヽコハリして輕く名ハ

偏にオムシャとのみいひならはせる也オムシャ
定りたる時日もなく来りてかゝる事
秋末より初冬の間の事也されとも年毎に
廿ヶ年ハ何かとつとへて何とも知れぬ山猿なる
歳を重ぬれは其の浦にて鯨捕なといはれ
ある言なるは常也月日を期して約する
ゆゑ明日後日なとのことなくて甚簡なる也
ゆゑに何月何日なといひてハ通せさる也

方角
日月食

捕る須臾を網捕る漁時日と約することなく月
の満るを日図なる日弦なる日残月なる
月なとを記して以て類ひしれと會得
させる事也方角なるもの東西を知て
風をさして以て知る日月乃食するハ天災
出る時天を仰き呼ふエラ井ナー ホー井ヤホヌバ
ホー井といひケテコルシンドコハパルベ或ハオッチキと
いふ敵か明不復して喜悦して至也

エは發聲也ラヰてハ死なりオーヰと呼ふ
者なれヤヰヌバとて活也こゝを死し活して
活絡へらと呼り助辭意なりしケーコル
シンドコも行器なるを呈する器と云ふもあ
りしパルベてハ裏也オッチキはなりきなれ
和人乃交易の品として如きとゝなる藝
あるも笑事いふ所事申入して居れ振舞
そはなれやとゝへても人生れて日月は此道理

いふものゝ生活乃いみなきなれ
恩貴莫大也志ふれり今その日月ふ見て
將る死し給るもとにいそのむく勤
めらてあるへきて只我聞て益笑ひて
御申もてまもいふれなら学ぶれ易き
信なりそその和人等のいふの月に
至て合はを何の何れかるに始り終れ天
晴もの見なると敬常に節に會すゝの紀

に驚き和人を仰くを神のことしといへり
しておほやけらの智識あれにつけれもと問是
我の華いそれ自ら知るも上ゝ賢き人
まりし高かくはかりを絵ひ暦と以ても
とつかさそはまねを頒ち賜りてそ初
高き志而も也と以下を聞き感哲をあると
伝し

前にさてハ東遣を以て御料とよまれ始
て鐵錢を行ひ札を鈔を為三章乃法を出し
風を移し俗を易ふを事とそれにも所
なるふ事からるなれ改なり但すの祝乃法等
用ひ其の醸敢を法までも世にハ行まで行き
されをの隨ふ所弊を生じ既す弊を
なくしてハ改るを宜と須改なにく又は第あり
これ出しくせまれて文行ひ其の弊出して

杯ゑぞに和人共雑居せし以前の頃より
とゝまる哉ありて次松前氏共舊録を以て
そのまゝ棄置れて治承の頃より宇治拾
遺並に宇清の胡人の事あれ説も有之は當
時宇清の初ゆる所となるをしあるさゝを
志れ無し漁夫商賈の利のみに往
来し亦亂哉避世哉逃亡れしその變もし
棲息枯死せるかものを論なし割據土

哉起りて後は特蠣崎氏有りあつまりて足
又志を本邦に得られ初めて足としその
識千古不卓絶し功績も偏に天地と
蒼生の為に生れ無しまれと哉其業はま
廣かりす失徳の主嗣立蝦夷は無く
亂をも治むへきとめとは復見る所に堪る
こゝ知りとして今も地にありて遺政敕
事苟且にてされて先は我か治めとく反復

丁寧にして太かり識ある事なりと鮮なり
海狗も其然ても又松前よりされは陽
之輩の魚藻米酒諸物を易する事なし
はじめより有ることなしと漸く者か云
漸く此等の今日なる事を地四方
海に環らし魚鰕の饒なる論をまたん山
川藪澤之かくして海を蓋て鹽なし
平原と鑿土とは禾黍を收穫し去る所

松前氏却て交易を禁するをいふ樽走
て是に改りし論なし無利なりしを
知しく猶疏なると蝦夷周回六百里と称
し其廣狭と言は我か九州より大く
二成り加へ二島リヰシリ クナシリ カラフト
エトロフ 等名數十百里なるもの多かれの
小島は牧挙すへからす次九州の富庶人
民三百萬なりしを去るは何なる己る凡

與鴻和夷と合て尊計をして纔にその
五十ヶ一を得るのみ是開闢の晉暮にして
むしろ荒蕪曠暮まて寛して風氣頗勢
最寒にしてむかしの何れ此人を驅て計
土地塑十一ニ於ゐてあまつ其墳は道陶を
製して漁せて攔昇地雑着子屬せしとも
且山勢小にして頗る次第に陵遅して甚
遼の山谷百圍の老樹にして是混沌津礼

てら字前に入りて蝦地を見ることは殊更に
林にして往といふも未深く塞をさゝへる
土地寒涼にして風雪はなはだし林木暢
茂円地なりといへども遅し況や人居盛に
獷火を熾にして河を渡て焼く是を詐暢茂せる
材木を伐て盛多に獷火に供せし人家其
しかも林銷を見ざる所に火出るの時
燎を發し灰燼を雨らして積りて地をなす

前にイシカリにして井を穿ち一二尺にあまて
七八尺に及りし亦數里にわたりて土を掘りしも
みな得ざりしハ日中に曠埜并ハ瞰望
即許されし地を闢くを限りにし志ある國ハ
先望みの人を招付し則を立人を息
すなハ乃術を設くるとき等唯とりて地をまき
て富庶にいたれハ北夷人を植立すると其地の帶
よく植まハ殖して王畿より移て民住

りの多し夷狄ハ外ニ略して来るこれを
已り國に置くこれ仁とも暴ともなる不懸隔
して得るとも終ハ實一也今蝦夷ハ大
王ありて東西南北より還るとも又土を
その皆ふそむきしハ後に彼を撫して此を益
するかの邊ハ我とに殊に身を方に略を
出すをもたれへまつりと招きて開き其の
こと統なし　北夷を稱カラフト唐鞨也

二人のはじめより子を生ずることあらは子を生ず
人の限りなき根なくして多くなることは管
窺ふ先輩乃者らかに算ふるにも及ばず
試に隠れたるを算ふれは萬古人二萬六
千餘となるべし二男女相通して此れを
萬三千夫婦に過ぎず三十年を通して一
夫婦若餘五子を生じ二十年間常にあり
左初あれは壮者六千夫婦五六三若子を

得ざるものもあらく死者必二萬六千人なり
是甚生子多からしむるの算ありて悠
らくハかくのごとくいふかたにあらず加ふ
瘐疫眼瞎あ利これの半なりとも常に
新にして得ることとなしに天付半ある
とも我許にもとも百年八九千人を増あり
後世千載たるまでにあらは其の繁
かくのごとし人あり往て此土にあり土あれ

て此より財の出るを知るべく徳は本にし
商の財は末なれとも常を財用の務めてなり
見物に役ありと知れるものは志の誠の
迷闇をとことと年しと其人は得もと得手なる人や
出仁と暴とを計れる理ある事は本に良の
興る所にて行しるべし此限りしても殊更
なるのは風俗敦樸にて論しなむに皆其實を
なくいしへ儀ありても禮儀をもて是にもまた之を節人

彼方の萬にて萬人にも衣服繍を刺する
文なるに次其人の恐る厚は刑製の似たるに我
好きものしこまを移せしは宜しく我の古風
と學びつし行ひたらは虎心ほど服
棲むるにも社をたてし神祇を祭すれと皆
ひの舊俗なるを称誉して言語禮法神を
崇ね禱祈の化信なるも我國の法明まのりて
志々とせにそ向ふいる遂に廿餘鴻を語

て猶襟左する者のあまた有と云へり
本朝定まりて唐制にならふの事皆と
以とし尤も飛鳥の為に變して夫人とし
衣をかへられぬ今の區々たる一島城あまた其数
倍を守りしも家門其の方寸の闘ありしせ
りは一丸泥を借りて立国ありき
昔奥羽越後皆是蝦夷の地なりしに郡
縣を置き是夷風を化して和俗となし

ければ繆也若し是を夷人に化しなる
絶えてなしとはいはずまた再更に偏見
なれば攻伐の際にふたり降を受納し
ては且ともかくもさる者は也若し御に今一五
恩威を數年化しむとはいへば是貴
みして効なし治亂の時勢に暗して
畧之しなしなすなし
蝦夷滿洲魯西亞の接近より是化し

て和俗とせんこと徑易かるべし識者あ
らば是我得たりとや思ふべし
洲やうの外方所に雑居するものを指
てゑびすなむいへるも自ら是を我俗とし
なし我舊きよりある法し押て自ら
移ることもしらず何者かあつて来るとも
まやかして變ぜんとして思らく俗ハあるまじ
し此俗我変じ得て廿古をすてんや

ずして更所に雑の我無し是和俗なるを
不於利
なし我の俗我以ての外文身断髪して
南蠻夷の俗猶これ似たるも我容却て
彼に異於是一朝一夕の故にあらず須
千變萬化中来る不博古乃人とは
和歳来ることあるへき是のまゝ無し
俗にを俄に変じて我の容を固くし

内閣文庫

見もとせは誰の心に猶豫嫌疑なからむ
猶豫嫌疑の名御して更に辮髪なし
めんとせしものゝ所為にて何是れにまくなれ
爲し蝦夷の頭實に醜きもあらて我の
頭やいはしらす亦将の辮髪をもて
形遠く外よりみる時は断髪同しく然
せて我聞けるに然し成程し今も夷人
の眼にも見よの事我もての偏に好醜無き

定かくの如きし既に一定と定めまて
を改るは是にて候へきや
夷人漢文字なしこれにつきては漢を懸く
因りてか我製作するまゝ幣の便
を得らるゝを却て高に然を與る贏余を
もて兼并を勸る弊害を依博となれる
銭の用物し皆に言語文字迄を
行ひ我をしてまりけり其宗我費を助

乃ちとあるべき時にいひかはしゝ法を行ひしを
しゝの行教へけるを執して不忠の臣その
罪科つぐのひして更に異なりし法律
紀綱此時始まりしに設廬諸りしけるを
異なるとも言語文字も互に通せさるもの所
纔ありし譯人何ぞ譯人何等の人ありし
高の一人を頼みて其理を決し人命を裁
断せんや是ゆへは竊盗姦夫乃類は利

其律をいふにせむ其上も甚長く所しも
法家をあらため御黨をますゝめして
官吏いまだ詳ならざるの所は則其軽く
その所を移して可也重きは離島に
其下けて人を種ゐ用ゆ或は死罪ゆる所
あるべしまずものゝ其衆人の望む處に
新に論ずると嫌疑なり一獄詐乃
其後衆凡前にして犯る死なるべしと

其人をして理を暁せしめ給間ハ科
まで行ハれざる事無く御仁徳を御施事
成ぬ事なれバとても仰ぎ知る人あることまじく
夫言語文字通ぜざれバ夷民を率せん
為にハ深く遠慮致し二ツ第く軽忽なる
執振舞を慎ましめしなり沛公関に
入前に秦苛ノ民命を活へしハ是ハま
為なる法縄れ民をあつかひ漢を興す一なり

ましめ紀をさとし指図し
蘭書を譯候ふに加模西葛杜加を以
地名大夫カムシャーツカと唱へ魯西亞人
掠られて歸りたる富五郎源七四蔵
福松等か地の人に聞しと皆大夫に
同しこゑをあまね我カムサッケと以ふカム夷語
魚也サッケ乾なり為なる等か如し一二に行
魚を捕て乾し持歸りてよろしきものなる

この称呼カムシヤーツカ素より何乃義なるを
知らし、次加模西葛杜加ハ譯義
又未詳、次恐らくハ其まゝカムサツケの轉也
蝦夷乃種類尚其地多くあるをカラフトは
北隅山丹オロコスメレンキーレン等と云種
類雜居せるより満洲の地にも似るを利
て我又是ハ俗とならてそのあるを異
類居自堅く其故俗を守りて稱せず

せり教法なし、婚姻を通せずして偏らく
ユウカリの文を業とするにあらずしてなにゆゑ
みれ思ふにあまも用ひ満洲に似せども
善まゝしあらく候須ひて日本を望
志らしも以て是をなしつる民にあらし、次
何となれハ當て彼の化育する所ハ
何の為故にかし、彼よ於つかずとありも
しけるものを宰せしむるにてなし哉

紀綱未た立さりしとけれはとて又争也しかるを
民を愛するものハ民附つき安し然して
猶これを已甚にいたる已甚即是争也
争ハ民乱みたるゝ是ハ損して民を損すれ
ものおのれ理に行ふあらされはおのつから大至哉
庶幾を防不利天運循環を彼とし
前面現世を侵されて何ならてか敵の慮
こそありけれしかるむとするは必ならしも争哉の

武を張外海を懐の基となることを誰かし
らきたとへ今それを甚はなはたしくしてこれあ
たおそし後渠猖獗を恣にし我明をおかす
ことあらしめして初てしく興起し寇を
うらみしく益二の紀をもつて擅にし彌加するの
也へ小還るに怯く醜虜かましをおそれてかも
人為に賊とせるを貫ハ天同ましきものなれハ
雖の論量知不可得へからさる亀のきなること

きりれ出ぬしと云とも田夫乃端今日よりて
地附城海に流れぬとは疑無かりす

東夷の狐貍妖怪なし寔にまれにして
此しは和人村落の狐狸を家とする人
あるを詰捕ときは、狐貍のことくに海
うら航すれとも夜陰に哭声
を聞なれとも尋常ならす事なりし放
て奇異なりしかれとも独も夷の
境のみならすあまたの人も絶てなかりし
却て此程を一事とも差の者なり夷人

もみえて以上よきい斗和人の見て狐踊と
なつ之れ戯あり猿楽れ狂言すん類に
して狐の人にりちまてる貴人の館に
いりてユウカリとかゝるが犬の知て吠かゝるゆへ
愕ぬ忽尾を顕はし回據して逃かゝる
犬乃まれなる其の二三人はり同し様に
回據して其の尾を奪一人と欲狐に成
なるもの己か帯が斑二而尾をなしてこれ

と威して立まつと中よく〳〵みあて尾を
なく人まれなる故狐乃觸と欲譯て尾が
なるものらうてもたく〳〵勝そしこまを置かて
まここまを見て名の狐なきて貴人今て
更にまつのみ狐を當てかゝるかあまんをあれ
が解を防ぐまあるまれを知これをそて
其の上ものが詮つもてすん人いまく志つり
狐狸を蒐むるつ美味なりとぞ故々狐狸を

みへに獲らまへて我恐ましく人々を私翻を
獲させしむるを妨ぐる斯るの相恐れて
取内地の者におはしぬ及ぶを読みたるやすく
妖変となし得られ経へたり且亦しと
以て奇事の絶無の謂はれたるを希
少なる事を以て言ふ此等の語違なり
文にかゝる事にして可也未だ見ることを遺遠
の消息併して嬉疑ひとりまぜて一事と取

両者なりし是を以て心に我虚みしらく信
しかし其の言我両ちらく妨げて甚害をさけて
後一二佐事を聞きて得たる今茲戊
辰より十二年前上ミ井丸チヤミヒトと云
老人なりしが車かいの材をもとむるが為
コメンベツの山中に入て異人が造る車を
見る櫂丸柄乃取りし宮を鑿軸にさし
納め櫂二我左右の手にとりもちて両傍

出しけるは取纏めて西洋風の具也
二人ありて獣皮の毛を去りたるをトンドと
云トンドを着女子一人前に立て来りしか
其の女子走りてチヤシンドの方に来り拝ハシラ
ヌカ其の女なり従ひし男の二人に捕られし由
を語信して出て来りしか今二人の来りて
思ひむかひ海濱にシヤモゐるやと問て行く
多くありとて人々の上宿に居る語り続

シヤラチブロをシヤキリに懸る宅の前に立
添へと教シヤラチブロを渡して造る儀なる
夷人の常に物を盛て肩に擔する也
シヤキリも此方にて丸太也シラヌカも
西濱にある地名女子の父の名ハ語りし
まの是ともあらしめひし前に女子并人
有しく行方紙来りしはたるを皆有
し事ノ取の女子をもしひ畢利

かくて二人は親て何方へか往やきし
フホ二人へまた逢ひしを得まで彼等の間
隔てて子細に聞へ居て己終りにアヰヌキツ
キツペウレプロシウべと云ふもの也と聴得たり
つもアヰヌ亦アヰノ方言此類小兒なる夷
人の稱なりペウレプロシウべ少兒養ふ處也
攫ひて去なしたるまでとキツクれ語夷人
乃解を得るべき族也チャシンド攫まえて、ある

また二人もまたかくいひやみて却て深草に
裏なりける緩ありて頭ねこ見へて其疾きを
いふに善き疾ならぬを以てそれと見るを
まづつきて流漂ひ來るとも渉つて跳るを
見てその島なる翔りて跳ねる物シンド
つれなる家にかゝる女子の歌れてる他緒は
あやしきことなりし人傳へて青き涙ぐれ
トミシオカムヰなりと云ふカムヰハ神なり

ニシオは魑魅の類にて悪物悪鬼の
名や先とし前クナシリの乱とて
松前にて二十七人の首を斬らるる事あり
その時かの結構とアツケシにて引来りし糧
乏しきにつきそれらの中に羅の者二人
と濱辺へ逃りしやも魚猟捕せしに逃て帰り
ほりし若かの二人山にかくれ居たるその
折から志つかいは彼も人と思ひてすこしもおそ

山に入しとチヤミニドする由しかて男子出来
かつ花行きるにてよく覚えしとまるを
の話也但異人みしきる美談とおもし且
我子も教ささる又異なり異夏とも云
て可也　右喜右衛門話

東邉乃モロランホシヤウチクとのふその三四年
前獨漁艇に乗りて海に出しに何の故
しられ美婦人舟中に入来り交りし

く李家にかへりて後とも忘れかねて来りかゞ
らるゝ信宿して去ることを既に久し
人に其の我見れはジヤウチク疲れやせて形神
憔悴たる故人窃に疑ひをなし問聊の
一女子まで訪ひ行に海に浮かぶ美丈夫あり
遇しかどもはかなき女子の家に思ひは通ひたる
ジヤウチクの事を聞し或時ジヤウチクが宅
に友人多く集飲しける人常にハ人の中に

秘をしみて取出す此時大に酔友人から向
戯ぶれに見せよと云ひ訪来れば佳賓ばか
美艶の女を加へ座の嬉しく頻りに
此等に譲りあるべしと歎いひ見せて一人
我輩に得たる我希その美人にはなくに
あやとつジヤウチク笑て則坐中にあつて
其坐客はやし見もむもしまてて見ることを
をし二成まよみて初て杯を上てジヤウチク

頃日狂する者多く人も怪みて言笑する
ものなれとも是は是妖なる事に係る所
世にある所かの美女子を以て男の為にし
其ことを去らしむる事の女子の為に其
し丈夫を絶えしめむとつま盛みなる女子の
為には誑かす事の志もなくシャウチリも女子さへ
今日なるは海獣乃妖にして人を交る
なとの一説あり又海狗海獺の類にて

いかにせしにやある人云　ウス丑生　福井千馬介話
四五年前キムニゲトウを以て大沼のある邊
ヌツメツミと以て夜ことに帷ある其の服大男
手をもちて人の喉をとれを眼を張てにらむてふ
以前の者見なし入道の類なりとも云ふ
その郷は發狂し或は卒倒しなとて夷人
居宅十二三ありし所なるかあまたの人に
いたり僅なりし三尺はかり如きれシコツを以て其

ニウケミヤンニといふの去年此表ゟ越候節ニ
語りしを聞しキムシケといふはイシカリの辺
なるトカチといふはシユフスと和人の
云ふ勢川といふ名は有る所なり
十年前喜右衛門ヵ上ヘ、井ら字ハヽミケヘ
此むかしで小舟に乗二艘連て出その日
天色殊ゟ快晴なるしヵハヽミケヘ向ゟ
て処で俄に風吹出しまる甚辺巌石多

く出来る所なりけやるとの石ありて家
入舟纜取りしに繋ぎしを見て自ら磐上より
のぼり風定るを待居たりしに其所より
三五町も隔て御巌壁乃側へ天より垂る
ものありて海水にまじりしあやしと浦かへりて岸の
立続きて此所海も深く海底の水升
雨ふりて空晴ゆゑ其を測るにまた甚垂なり

其降物ハ大さ凡小豆を丸くなしたるに
又次に雨を降らす雨ハ大さ掌
の如くなる雨の粒又ハ力を用て礫を
打様なる様に其降り風烈しく吹きたると
見ゆる所に　異物尾を海底に入たる
見へし其頭ハ三千霧中に顕れてみしるに
見給る給ハ高さ其の邊まで山と見えし
山のきなる直立二三十丈ありたるを見て

龍といふものハ水をまき河を降らしむる
ものにて此もの形ちて長し其頭地より眼を
やうに毛をたてる物ハ鱗やあるべきよく
くるれとも定て見えぬはみえて形状
をも河みへかし其附にはいとみえて風雷と
はり其物ハ虚空の雲共の怒涛を
未年らさ稀なる天霽て一ツもなきを
あらしわたり来ありし一夜の嵐ハ吹つれ

かねまて池乃ありて盤果て足柄大ひに
幸にして南あたりにやや北の川すゑ
秋あるに年前松前乃海へ龍三ゟ
つきて海水と両き消さり津軽の岸と
松前との中間の程をみしるまんて争
出るを見るらし二まても半時餘りし高
二を北の方へ行一は名も知れかへりし
聞きくを様あり秋時分にしてよくあるを

なりし
二十年前松前大炊ヵ村シリウチと云
み黒毛の狐ありて皮をとるとて紫を遣らし
と欲ハ一日ニ命を脱りしてる黒狐を見
銃を発きしに一方真黒みして狐をん
脇をつき家帰来れ重て厚き伴郷と
ふ所やとなる伴蔵シリウチ村にゆきて
ものかたり数日泊りして初て見る銃をうしきて

まれに又忽暗昧にして是に次伴蔵は
よく我池を殺さむと其の命を取る
吾か私にあらす又雨中に汁邪を防くに
すむ幻術用ひて一旦免れしと終に河
ちまのもとりて全からむとせしに謀りて速に
術を解て死をまぬかれ眼をひらき見る
窟をはなれて烟霧のたちこめし消失て
て足跡を見るに發しにける中川大炊大夫

喜び割りて其肉を召中津源兵衛に食
はしむ源兵衛食して謹となりて迅雷
越き其後二三年病て死伴蔵悪疾
わつらひて死子まて伴蔵といふ者に使
て遊びけるを果して抓あり夜に奇の
気味くるを之として自ら溺死て用ゐあらぬ
驚きたる我か宿くに業報と云人有
語りしかたりにまかせ海中に鰊魚なりけるとかや

そむかじといひ又和気華山院殿より来りし
狐なるを友ハみな京へ帰りしの我丈妻に
おくれして心得つ次やくやう狭まおもひし
とは思ひしかもて且三代けるをおに萬山瑰
家より来嫁しさるまへ人をおとり呈を
なりし給ひて何も鰊十郎か字しるし
實はまことの人にありけるによりて附會し
且やみにて其説の眞偽ハ審らかならず

今年までいまた鰊初て多し何ゆゑか世
にいふのとハおもしと思うて黒毛狐の
靈或玄狐稲荷とよびて宅中にまつりし此
カラスナ月やうやう所へ祠を移しまつり喜右衛門
弥三郎の語るゆう喜右衛門の父と源兵衛と
友なりし故へ講を成てもはしに十年
遊ニまゐりし物語せし事を
喜右衛門の八十シケり居まりし夏の夕

海面おほハなるかな盈乃ありて興有利
人はれて窓より望み居りしに七八町も隔
たりたる思ひ海中にハ小さき島かき物かた
ち風もなきにハ陸の方へ走り来ると驚
きし其両邊潮みなぎり行きもの忽岸
にいたり岸に浪のよりて寄る砂堆成
なして長堤乃ごとく成りて草生ひ茂り
割りて緑にハ田き艸木たて猶人居る

せ山のかくれたる所に海中にあらし時
ハ黒く見えしに陸への方へ近て入ハたゞ風
みしる日のまくまる物あるしその方まへ
とみ行て現はれりもやし海をそくる時
ハ潮吹きくら行て園の形をなしくまなる
しいかなる物なるか知りし此州暑ま
まれなるの童のうちとて海かなるとも
しつ一人ハ我多みなる先にをも一人ハ走り

てしはらくなかれける其間凡百余人ハかりも
陽にもれて見しかの佐物がまてよ觸や
きんと心にはかりしに幸にして二人の
聞とゐけりて甚ましこれをきゝてえれの
妻子まても皆戸に立鐘を持て佐物の
あつまりて甲ひ撃ましはしてヤアヤアく
と聲と揚すしてわやしきはひゐてれて
いは我かくするこそのかし此等我もなし　二三オ

カムヰとも風中に鬼物なせすれの意
なりとし
アヅメのテコラシといふことそりなクニチシリカ年
にや陪に婿となりしとゐ猶居たるものハ御
人いかにとつ王の所へテコラシまれて我もさる
それはかゝりなくハ神の来り通ひ給ふなれ
せんすへなしとおもひしに世の病するの人
く流の星たれるものゝ枕まてつきしるとい子也

来るものゝきやみてすゝみきたりけることシヤク二千
シリカ今年閏月乃ケンバクルといふものゝ来りて
ありて在留蘭人ハチヤウチリの事を聞し
海濱よりハ南にはれたるそらを来る事越え
二三月半年ほどしかし前ハ到帝て二ヶ留
とて舟路てハあまり遠からぬもの也　熊二郎話
福井千島今の舟の往て東濱にミツナ井ありて
てオキナといふ見ちゝの石五町ばかりを隔て

小山乃ごとく長くつゞきたる物海中より
浮出る紙見鯢魚なるとわかれひ子を示し
かけあへしかともむとし櫂を執る者や
ゐぬそうけ暫く波浮ひて更に言を出き侍
俄に舟共ひいし岸ハ方に近付てとを急也
千島今常に鯨鯢にあへる遁る事を知れ
あまりあわされてまされて進やしへ
ゐ打對へる漸くしてかくしく見オキナ

也波かし劇しく自然揺らにけれハ洪波滔
舟覆没せしもあるよしにそ物ハ飾らと
洋乃方へ行去るまゝ大なみ数町隔る
所までよせ来りし オキナ ハ全形を見
歩るとの稀にして審なることハ事を
つかハしく多くはうきて蝦の状れとし魚を
かひ長ふ三十三つゝあるとかや其一つハ
重さ大きさ小魚ましても三十歩つゝ有大なれ

これの事に傳へて シャチホコ たる巌壁高く峰
海まて深きところかゝる大魚も同しことく
岸近くよりて遊泳してありしか望むに稀成
魔さん形の名ある事いのまはりて鯢を
呑こむといへる唐土にて浪といふそ
三十年まへ東嶋乃庶来て内地へ回る
ことあるしに形なるものかくもの閑くに
東遣乃ものハ南部へ回るとしとの松前

乃ありしものをみれ津軽へ行しと只
鹿ハ幾百千となく集りて海よ入前より
よる若潮とひとつき濤浪清く晴する鹿その
後ハ前見えさるかぎりにあれを助く泳ける
みれかくのなきく一團と成る前若鹿疲
るる比にハ後若かけりて先となり三百丸息
潮を誦ふて東西よりて鹿ハめをし渡る事
をかねしとも同る様と只ふてを一乃まかり

是より前鹿多くして付後されよ有り熊
二郎も物語しきゝ承りてこれを見たり
しものゝ只承きゝしてたまへり

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan